

〔資料〕：「国際文化」教育の現場から

## 「ことばとの出会い」

——総合講座「世界の言語」に寄せて——

国 松 夏 紀\*

本稿は、1995年度「総合講座Ⅴ 世界の言語Ⅱ〈後期〉」第1回（9月22日；金曜，2号館101教室）オリエンテーションの「講義メモ」をもとに、本学における「国際文化」教育のあり方，外国語教育はどうあるべきか，さらに大教室での授業運営の方法などの諸問題について考えつつ，教室で述べたことをほぼ忠実に文章化したものである。それらの問題について，何らかの妙案や結論を得たということでは勿論なく，取り急ぎの問題提起として，文字通り生の資料を例示するものである。授業改革の手始めに教員同士の授業参観をしようというプランも容易に実現はしないようであって，この場を借りて「授業公開」を試みるものでもある。大方の，御意見・御批判を頂ければ幸いである。

なお，本学の「総合講座」は，現行カリキュラムで全学部共通の「一般教育科目」に位置づけられているが，筆者が個人的には「国際文化」教育の一環として意識しているということでもあります。

### 【それでもやはり私語する学生たち】

今日は後期第1回，オリエンテーションということで，講義日程のこと，この総合講座の成り立ちについて，参考文献，言葉をめぐるあれこれ，といった具合に，多少雑談風にお話しすることにしましょう。オリエンテーショ

---

\*本学文学部

ンといっても、時間いっぱいみっちり話すつもりですから、皆さんもそのつもりで。立っている人は、まだまだ詰めれば、席に余裕があるから、座って下さい。90分立ちっぱなしはきついよ。プリントは、回ったかな。

はい、静かに。ちょっと、騒がしいな。皆さん気がついていてでしょうけれど、この教室には、前の方の席に社会人聴講生の方が何人もいらしゃる。こんなにうるさいと、桃山の対社会的評判にも関わるんです。前期から聴いている人は、またお説教かと思うかも知れないけれど、後期最初のこの機会に改めて注意を喚起しておきたい。私もこの総合講座チーフとして責任上あの手この手を考えた。「イエロー・カード」を出したこともあるんですよ。大きな声で注意すると、授業を中断することになって、講師の先生に申し訳ないから、私語が目にあまる学生には警告の大きな黄色いカードを渡す。それでもダメなら、「レッド・カード」で即退場という約束です。かなり、効果はあったように思うけれど、あまりに子供っぽいとの批判があり、こちらも気恥ずかしくなって一回でやめました。五月雨式の途中入場というのも迷惑なんだな。特に、出席を重視している関係で、出席票だけを目当てに明らかに頃合を見計らって、授業終了間際にチョロリと忍び込むけしからんのがいる。そこで、まず授業開始後30分したらドアに「遅刻入室厳禁」という張り紙を、ドアを封印する形で貼りつけたんです。ところがそれを破って入ってくるのがいるんだな。これには呆れて、とうとうドアをロックすることまでしたんですが、そこまでやるか、大人気ないと批判され、これも後期は止めることにしたいと思います。

私語は、喋っている本人は小さな声と思っても、こういう大教室で数集まると大騒音になるし、何よりも講義に集中しようとしている君達の仲間の迷惑になることを考えてほしい。楽しげに喋っているその前後左右の人は口には出さずとも、この野郎と思っているんですよ。実際、出席票に「時間中ずーっと俺の前の奴は喋り続けだった。何とかしてくれ」というように書いてくる学生が多い。何とかしてくれといっても、こちらにも限界がある。皆さんがお互い同士注意しあってほしい。90分間教師の一方的な話しを沈黙のうちに

## 「ことばとの出会い」

聴き続けるのは楽ではないし、適度の応答までを禁じるのではない。時間潰しに一番良いのは、教師の言ったことを細大漏らさずノートすることなんだけれど、教師の言ったことに関して友達と即応的にディスカッションもしてみたいだろう。教師の迷惑はともかく、君達の仲間の迷惑は充分考えてもらいたい。そりゃあんまり学生仁義に反するんじゃないか。

### 【ようやくにして本題に】

いいですか、それでは後期の講義日程についてお話ししておきましょう。というのは、配布されたプリントにもあるとおり当初の予定、つまり年度初めの「講義計画」に若干変更点があるからです。まず第一に、来週に予定しておりました永野芳郎先生の「世界の言語：概説」は、永野先生がご病気ご療養中につきやむなく取り止めといたします。前期にも永野先生の急なご入院で休講せざるを得なくなり、受講生諸君には申し訳なく思っています。永野先生は、もうすでに退院なさっているのですが、ご自宅で療養中とのこと、講義は見送らせていただきます。なにしろ、「インド・ヨーロッパ語族」に属する言語を全てマスターしたと言われる言語学の大家ですので、余人をもって代え難いのです。ご了承下さい。それで、次週（第2回）は少し繰り上がって、都合で順序も変わりますが、山川偉也先生にギリシア語について話していただきます。山川先生は、ギリシア哲学がご専門で、古代ギリシア語と現代ギリシア語の両方に通じていらっしゃる貴重な存在ですので、興味深いお話しをうかがえることと思います。私自身も、ギリシア語についての講義を聴くのは初めてで、山川先生によるギリシア語入門に期待しておりますし、皆さんと一緒に勉強しようと思っています。

第3回は、一応予定通りということになりますが、山本雅代先生に英語をベースにしたバイリンガルについてのお話しをうかがいます。言うまでもなく、世界の言語に「バイリンガル」という言語があるわけではありません。ちょっと角度を変えて、バイリンガル——2言語修得という観点から人間と言葉について考えて見ようとするものです。山本先生は「バイリンガリズム」

の研究者であると同時に勿論実践者でもあります。

第4回は、1週繰り上がって、Dario Gonzales 先生の [ラテン語について] になります。ラテン語はかつてヨーロッパ世界の共通・共用語の地位を永く保ってきた言語であり、ギリシア語と共にヨーロッパ諸言語に多くの影響を与えています。そういった意味で、ラテン語とかギリシア語は、英語・ドイツ語・フランス語・イタリア語・スペイン語そしてロシア語とたどって来た前期の講義に加えるべきだったのですが、日程の都合や Gonzales 先生の海外研修の関係で後期になりました。通年受講者はまだしも、前期・後期どちらかのみ受講者には中途半端な感じになったかも知れないのは、チーフとしても残念です。なお、Gonzales 先生は、南アメリカはペルーのご出身で、スペイン語の専門家でもあります。また、これは余計なことですが、前期にスペイン語について2回にわたってお話しいただいた西野勝子先生は、Gonzales 先生の奥さんです。

えーと、1週繰り上がって第5回の井本英一先生 [ペルシア語について] から、アジア系の言語になります。前期、ヨーロッパ系の言語でまとめたのに対して、後期はアジア地域の言語が中心になります。井本先生は、西南アジアの地域文化研究がご専門で、イランの国語であるペルシア語の権威でもあります。ペルシア語の翌週は、林宏作先生の中国語。当初の予定では、11月10日だったわけですが、その後この日が学園祭第一日ということになって休講、これも1週繰り上げました。林先生は、中国語・中国文化のご専門でいらっしゃることは勿論ですが、書道の大家としても著名な方です。中国語は、桃山祭・体育祭の休講をはさんで、2回連続の講義となります。その次は、韓国・朝鮮の歴史・文化研究ご専門の藤井幸之助先生 [朝鮮語について] が、やはり2週にわたってあります。年末の第11回は、インドネシア史ご専門の深見純生先生のインドネシア語講義が一回。そして、年明け第12回、これで終わりですが、友沢昭江先生に、まあだいたい我々のネイティブ・ランゲージである日本語について、講義していただきます。友沢先生は、外国人留学生に「外国語としての日本語」を教えていらっしゃる方です。ふ

## 「ことばとの出会い」

だん我々が何気なくというか、唯一不自由ない言語として意識することなく使っている日本語を、意識的に対象化してみるとどうなるか。外国人が日本語を学習する場合、どんなところが難しいのか、といった話しをうかがえることと思います。

こういうスケジュールで、英語：バイリンガルをはさんでギリシア語、ラテン語から始まり、ペルシア語、中国語、朝鮮語、インドネシア語、そして日本語と後期の講義を進めて行きます。講師の先生方には、文字と発音、ごく簡単な文法解説、その言語の特徴といった初級語学のさらにさわりの部分、併せて関連する文化的事象について、ご自分がその言語を学ぶきっかけや留学・旅行などのエピソードをまじえて、判かりやすく噛みくだいてお話し下さるようお願いしてあります。しかし、それ以上に綿密な打ち合わせはしておりません。具体的な講義内容は、各担当者におまかせしてありますので、それぞれの個性豊かな講義となるでしょうし、ある意味では「バラつき」が出るかも知れません。その点は、予め承知しておいていただきたいと思えます。それから、チーフとして私が1時間フルに話すのは今日だけであります。来週からは、それぞれの言語の専門家が講義し、私はプリントや出席票を配ったり、試験をしたりの裏方に回ります。つまり、一連の講義を通してのまとめというようなことはしません。というか、これだけ多種多様な言語についての「まとめ」など出来ない、というのが正直のところなんです。この点でも、「世界の言語」についての総論的講義をお願いしていた、永野先生がお休みなのは残念です。総合講座だから、「総合」しなければいけないんですが、そんな事情ですので総合は受講生諸君に委ねるしかないかな。むしろ、諸君の個性豊かな総合に期待したいですね。

受講生諸君には、ギリシア・ローマからイラン、中国、韓国、インドネシア、そして日本と、まさに毎週のように異なる国々を訪れる旅行気分であらゆることに聴いてもらって良いわけです。その過程で、それぞれの言語にほんの一端に過ぎないかも知れないが触れて行く。それをきっかけにして、その語学に志す人も出てくるでしょう。大いに歓迎するところですが、少なくとも世界

の言語の多様さ、日本語と英語だけが世界ではないということを実感してもらえればと思います。とりわけ、文学部以外の経済、社会、経営の学生さんは、今のところ「第二外国語」が必修ではないので、英語以外の外国語にチョットでも触れる良い機会だと思います。来年度から実施される新カリキュラムでは、E・S・Bの学生さんも「初修外国語」が卒業単位として認められますが、現行は「随意」で単位にならない。それはともかく、まず出来るだけ多くの世界の言語そのものに触れる。それを通して、それぞれの異文化にも接触し、さらにその積み重ねによってとかく狭く固定しがちな我々の言語観＝世界観の拡大・更新をはかる。これが、本総合講座の意図であります。

### 【出欠席と試験】

出席は毎回とり重視します。試験は学年末試験期間中に論述式の試験を行います。毎回400前後の出席票の整理に3～4時間はかかるわけで、出席をとらなくて良ければ、チーフとしてこんなに楽な話しはないんです。それに、出席をとらなければ、本当に聴きたい人だけが出てくることになって、教室の静粛は保たれるし、お互いこんなに良いことはない。しかし、2、3回の抜き聴きではこの講座の意図が満たされない。頑張って全回出てもらってようやく意図に近づくのですから、きちんと出席はとることにします。全回出ても、3000とも5000とも言われる世界の言語からすればほんのわずかなんだから、1回でも聴き逃したらもったいないと思うんだがな。出席票には感想・質問等自由に書いて下さい。質問に関しては、私が担当の先生に取り次いでコメントをいただき、それをプリントにして受講者全員に配布します。先ほど後期日程表の後から配った《95総合講座 [世界の言語] Q&A抄 第4集》がプリントのサンプルです。これは、前期の英語、スペイン語、ロシア語に関して、出席票に書かれていた質問事項に対して各担当者から寄せられた応答をまとめたものです。本当は前期中に渡せば良かったんですが、いろいろ忙しく夏休み作業をして、ようやく出来上がったものです。参考までにお渡します。自画自賛するわけじゃあないけれど、様々な言語に関してこ

## 「ことばとの出会い」

んなに面白い読み物はチョット他にはないよ。一見するとイラストもなくそっけないというか味気ないプリントなんだけれども、良く読んでもらうと様々な情報が一杯詰まっている。場合によっては無視しても差し支えない素朴な疑問から、手短なコメントなど困難な高度な大問題に至るまで、先生方が忙しい中チーフの面倒な要求に応じて下さったおかげです。

確か、受講生が200名を超えると出席票の整理は事務所でやってくれると聞いたことがあるんだけど、先生方にコメントをお願いする必要上、予め全部の出席票に目を通し重複する質問等を整理しなければならないので、事務所も忙しそうだし、出席簿への転記も含めてチーフの仕事として自分でやっているわけです。それから担当の先生に回し解答をいただくので、なかなか時間がかかりすぐ次の週にプリントを配るというふうにはいきません。コツコツとワープロに入力し、何回分かまとめて印刷することになります。その点、予め承知しておいて下さい。

全回出席が望ましいのは先ほども言った通りですが、諸君にもいろいろ事情があるだろうし病気することもあるでしょう。そこで、出席の目安ですが、一応許容範囲として半分を考えています。つまり、後期今日を含めて実質11回のうち、5、6回は出席してほしい。かといって、残りは「自主休講」しても良いということではありません。あくまで、試験を受けて採点・評価する際の基準ということです。極端な場合、明らかに出席ゼロで堂々と試験を受けるのがいるんですね。これは、一通り答案は読みますが、容赦なく落とします。ちゃんと出席している人に対してフェアじゃありませんからね。そういう意味でも、出席はきちんととるようにしたいのです。それから、特に4回生に言っておきたいことは、就職活動等で特別の配慮はしないということです。厳しい状況下での就職活動が大変なことは良く承知しているつもりですが、配慮しだすと切りがないし、4回生であってもきちんと出席を重ねている人もいますよ。うまいこと時間のやりくりをして、できるだけ出席するように心がけて下さい。

試験は論述式で、各担当者の講義内容を踏まえたまさに総合的な問題を出

します。一例として、今年度前期末試験問題を紹介しておきましょう。

《英語・ドイツ語・フランス語・イタリア語・スペイン語・ロシア語（及びそれら諸言語に関わる文化的事象）について、その相互関係を差異と類似という観点から、日本語（および日本文化）も視野に入れつつ、考えるところを述べなさい。》

まあこんな具合に、難しいといえれば難しく、どうにでも書きようがあるという点では易しいとも言えるし、全部の講義を聴いていない人にも配慮したつもりですし、全部聴いている人にはそれなりにすぐれた解答を書き得ると思います。いずれにしろ、後期も同じ問題が出るのではありませんし、これからみんなと一緒に講義を聴きながら、試験問題についても頭を絞ることになります。ついでですが、前期の試験結果はもう出ています。学務課では教えてもらえないようですので、知りたい人は研究室に個人的に聞きに来て構いません。お教えします。私の研究室は、アンデレ館、研究棟8階の813です。出講日は月・木・金、ただし、木曜と金曜は講義の後だいたい会議なので、月曜日の昼休みから夕方にかけてが無難です。月曜の午後は、オフィス・アワーというのかフリーな面談時間に当てていますので、何やかや用事をしながら、ほぼ夕方まで研究室におります。何か他のことでも構いませんから、気軽に立ち寄ってみてください。

それから、前期にも注意したことなんですが、出席票に感想・質問等書くときに、誤字・脱字には気をつけて。いつも特に気になるのは、「講義」の「義」ですね。これを何故か、ごんべんの「議」を書いている人が多い。こちらもだんだん自信がなくなってきた、何度も辞書を引いたほどです。やはり、義理の義ですよ。出席票には本当にいろいろ書いてあって、前期末にはこんなのもあったな。この総合講座のことを他大学の、日大だったかの、友人に話したら、そういうのはその大学にはなくて、羨ましがられたと言っただけですね。[世界の言語]は、桃大の誇りとする講座です、という意味のことが書いてあった。こういうのを読むと、正直言ってうれしいし、日頃の努力も報われるというもの。だって、前期末、ロシア語について話すまで、私

## 「ことばとの出会い」

はどうも教員ではなく出席票配り専門のおじさんと見られていた節があるくらいなもの。チーフ冥利に尽きます。

ところが、実を言うとこの講座はまったくのオリジナルではなくて、ヒントが別のところにあったんです。手の内を明かすことになるけれど、そのこともこの機会に話しておきましょう。

### 【S F Cとは何か】

これ何の略だか知ってますか。S, F, C, 知らないとな何のことだか見当もつかないですね。知ってみるとな—んだと言うことになるんですが、もったいぶらずに種明かしをしましょう。慶応大学の湘南藤沢キャンパス, 湘南・藤沢・キャンパス, それぞれの頭文字を採って, S・F・Cというわけです。総合政策学部と環境情報学部, 二つの新設学部とその画期的語学教育カリキュラムによって注目されたところですよ。大学設置基準のいわゆる「大綱化」以降の大学改革のモデル・ケースの一つでもあります。

本学でも, キャンパス全面移転を含めた大学改革の一環として, カリキュラム改革が行われ, 来年度から新カリキュラムが実施されるのですが, その改革案の検討過程で, 語学, 特に「第二外国語」教育の改革に関して, 何故か新任間もない私にプラン作りの仕事が回って来た。誰かがやらなければならない仕事だから, しょうがないとしても, どう手をつけたものやら途方に暮れてしまったというのが正直なところ。そこに, ヴェテランの先生からこういうのもあると, S F Cの話しを聞き, その「言語文化コミュニケーション研究所」発行の学生向けパンフレット『外国語履修ブックレット』(1992. 4. 1 刊) の提供も受けたのでした。一読してこれはいいと思いましたね。このまま桃山に持ってくるのは無理としても, 何とかアレンジして使えないかと考えたのです。

S F Cの外国語教育プログラムの特徴は, 英語だけを必修にせず, 英語も諸外国語のうちに含めて選択肢の一つしたこと, その選択のためのオリエンテーション期間と言うか, あれかこれか考えるための猶予期間を充分にとっ

たことです。春学期のほとんどがこれにあてられます。英語週間から始まって、中国語週間、マレー語・インドネシア語週間、朝鮮語週間、ドイツ語週間、フランス語週間と続き、それぞれ2週にわたって、それぞれの語学に関わる各種のデモンストレーションが繰り広げられるとのこと。ネイティブ・スピーカーによる講演とか講義は勿論、中国語週間ならば、食堂で中華料理が供されるといった徹底ぶりだとのこと。学生達は、それらを遍歴した後に、英語を含めてどの外国語を学ぶか決定するというものです。外国語学習で決定的なのは動機付けですね。どうして、何のために勉強するのか、それが弱いと後々までたたることになるし、挫折もしがちです。英語は義務教育の段階から、まさに義務的に勉強してきたと思うんだけど、2番目の外国語は多くの人が大学生になってから、自分の意志で決めるのですから、意志決定のために様々な情報を与えてくれるSFCのやり方は、学生・教員双方にとって賢明だと言える。でも実際はなかなか厳しいみたいですよ。まず、英語、中国語、マレー語・インドネシア語、朝鮮語週間が終わった段階で、中国語、マ・イ語、朝鮮語の履修受付が行われ、ドイツ語、フランス語週間が終わると、これらに加えて英語の登録が行われる。結果的には91年度実績で英語16クラス、マ・イ語1、朝鮮語2、中国語3、仏・独各4と、英語が圧倒的に多いんだけど、英語に関してはTOEFLが実施され、グレード別にクラスが編成される。

クラス編成が終わると夏休みまで3週間6回、早速入門コースの授業が行われ、春学期末試験もあります。ここまでを一まとめにして、「総合講座 諸国語概説」と名付けられ、「一般教育科目」の2単位としてカウントされます。そして、秋学期からは、様々な機材・教材・メソッドを駆使して「インテンシヴ」にミッチリ学習することになります。

それから、例えば、1年次「これから重要なのは中国だ」と意欲に燃えて中国語を履修し単位もとれたけれど、就職に備えて英語をもう一度さらっておきたいと言う学生には、「教養外国語」という別のコースも用意されています。

## 「ことばとの出会い」

慶応大学の宣伝みたいな話しになって来たけれど、動機付けのための猶予期間、英語を含めての語学選択、この辺は我が桃大でも採り入れられるなど思ったわけです。まず、前期は外国語オリエンテーション期間として、「総合講座 世界の言語」を新入生全員が受講する。受講終了後、前期末に履修登録し、後期から授業が開始される。「総合講座 世界の言語」は、総論、西洋古典語としてギリシア語・ラテン語、東洋古典語としてサンスクリットもしくは「漢文」、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ロシア語、中国語、朝鮮語、そして日本語、と各言語1週1回の講義が13週続く。本学にはスタッフが揃っているので、語学のバラエティの点で、慶応よりもはるかに豊富な講義が提供でき、選択の幅がそれだけ広がることになる。言うまでもなく、前期それぞれの専門の基礎的学習も進んでいるわけで、それと併せて自分の専門的研究に必要な外国語をじっくり選んでもらおうということであります。「共通教養科目」の単位にもなるし、半期でこれだけの言語についての講義を聞くこと自体貴重な体験だろうしね。少なくとも、ロクな情報もないまま単位のためだけにカンで選択してしまう弊害は無くなるだろうと考えました。ざっとこんなプランを立てて検討を進めたんだけど、いろいろと問題があって、結局このプランは潰れてしまったんです。計画倒れの一番大きな原因は今あちこちの大学で導入されている「 Semester 一制」の実施が本学では見送られたことですね。この計画の大前提は、半期完結の Semester 一制だったんですから。

ところが、捨てる神あれば拾う神ありというべきか、見る人は見ているというべきなのか、闇に葬られたと思っていた「総合講座 世界の言語」は、「一般教育科目」の総合講座として甦ったわけです。一昨年度末急に開講を依頼されて、総合講座チーフは初めてのことで様子も分からないまま、ともかくも昨年度開始し、今年度辺りはどうにか恰好がついてきたというところ です。

それからもう一つ、潰れたプランは潰れっぱなしではなく、副産物があります。新入生向けに編集されたパンフレット『ことばとの出会い——英語以

外の外国語案内』が、それです。94生から配布しているから、93生以上の諸君はひょっとすると目にしたことが無いかも知れませんが、いわば「総合講座 世界の言語」のエッセンスを読み物的にまとめたものです。せめて、これだけでも読んで英語の次の外国語を選択する際に、手がかりとしてほしいというのが、編集意図であり、多くの先生や大学院生、さらにチャプレンや学長までに協力してもらって出来上がりました。機会があったら、これも読んでみて下さい。

さて、次に参考文献をいくつか挙げておきましょう。えーと、後期のみ受講の方はちょっと手を挙げてみて下さい。かなりいますね。半分くらいかな。それでは、重複しますが、前期紹介したものももう一度挙げておきましょう。はい、板書しますから、その間どうぞご自由にオシャベリしておいて下さい。

#### 【参考文献】

1. 柴田武編『世界のことば小事典』大修館書店 1993年初版
2. 朝日ジャーナル編『世界のことば』朝日新聞社（朝日選書436） 1991年初版
3. Kenneth Katzner(ed.) The Languages of the World.<Routledge> London & New York 1st.1977, New ed.1995.
4. アンドレ・マルティネ編（泉井久之助監修・風間喜代三他訳）『世界の言語』<近代言語体系2> 紀伊國屋書店 1972年初版
5. 北村甫編『世界の言語』<講座言語第6巻> 大修館書店 1981年初版 1982年再版
6. 金澤正綱著『英 独 仏 伊 西 比較しながら学ぶ西欧5ヵ国語』イタリア書房 1994年初版
7. JTB 出版編・刊『六ヵ国語会話 POCKET INTERPRETER』1987年改訂32版
8. 新名美次著『40ヵ国語修得法 私はこうしてマスターした』講談社（ブルーバックス B-1045） 1994年初版

## 「ことばとの出会い」

ここに挙げたのは、手近にある本というか、今でも入手し易い本、あるいは図書館にある本ということで、要するにこの参考文献の選択には特に学問的基準といったものはありません。言語学が専門でない私がちょっと見回してみただけでも、アトランダムにこの位は目につき、それぞれ興味深い内容を持っていて、まさにこの講座の参考になる本ばかりです。順番に、ほんの少しだけでも紹介しておきましょう。

1の「小事典」は、世界の127言語に系統不明言語として日本語がプラスされ、計128言語についての解説が収録されています。「国（地域）別使用言語一覧」なども付いていて便利な本です。2は、かつての「朝日ジャーナル」に連載された記事が一冊にまとめられたもので、見開き2ページに一つの言語の割合で110位の言語に関するエッセイが収録されています。確か同じような趣旨の連載が新潮社のPR誌「波」で続いているはずで、そのうち本になるんじゃないかな。3は、英語の本ですが、とても面白い内容を持っています。500位の言語に関して言及し、200の言語については、代表的文学作品などからの文例がついているんです。その英語訳が示され、さらにその言語の特徴が簡潔に叙述されている。しばらくの間、通勤電車での愛読書になったほどです。勿論通読するのではなく、あてずっぽうに開いたところを読んでいったのですが。

Katznerの本でショックを受けたのは、Artificial Languages 人工言語って言うんでしょ、エスペラントなどについての部分を読んでいた時です。人工言語は、コンピューター言語とは違い自然言語を元とした世界共通語の試みのことで、最も有名というかそれなりに成功したのが、エスペラントです。エスペラントはポーランドの言語学者ザメンホフによって1887年に考案されました。極めて単純化された文法と論理的に構築された語彙を特徴とし、世界の名作がエスペラントに翻訳され、改良も試みられたが、結局ザメンホフの基本に帰った。まあ、こんなふうにかかれてるわけです。永野芳郎先生によれば、専門の言語学者は、エスペラントを言語とみなしてはいないそうです。言語は人工的に作ることが出来ないというのが、言語学の前提だか

らだそうであります。また、やはり永野先生によると世界共通語を目指すとはいえ、エスペラントは英・独・仏・伊の特徴が取り入れられているので、それらの言語の使用者にはとっつきやすいが、それ以外には不利だそうです。Katznerの本にはさらに、エスペラントを初めとする人工言語の欠点は、native speaker とその nation に裏打ちされた national prestige を持たないことだ、というように書かれていて、そこまではいいんですが、ショックを受けたのは次の箇所です。《近年、人工言語に対する関心が急速に薄れ、とりわけ第2次世界大戦後、英語が普及して、人工言語よりはむしろ英語こそが普遍言語 universal language になる可能性を持っていると信じられているようだ。》というような意味のことが書かれているんですね。ロシア語なんかを教えている立場上、日頃、英語だけじゃ駄目だよ、英語プラスワンでなければこれからの国際化社会には通じないと言っているわけです。そこに、英語=universal language と来ては、ショックです。もう無理に「第二外国語」学習する必要は無く、その分、世界普遍言語である英語の習熟にかけた方がよいのかな。しかし、その一方で、旧ソ連なんか典型的ですが、各民族固有の言語への注目も盛んであるわけであって、言語による民族のアイデンティファイを考えれば、この世界、英語だけでコトが済むわけではなく、個人にあっても第二、第三の外国語が要請されるのもまた事実であります。

4と5は、まあ専門書であって日本の言語学の水準を示すものとも言えるんでしょうが、読み易くはありません。ところが、こういう本でもちゃんと読んでいる学生がいるんですね。さきほど言った前期試験でびっくりするようなすぐれた答案があった。採点しながら、感心すると共に、こういうことは講義ではどの先生も話されなかったはず、きっと何かネタがあるな、と思っていたわけです。それで、夏休みに東京の実家にちょっと行った時、玄関に積み上げてある本の頂上にたまたま、この大修館の『世界の言語』があつてピンと来たんです。帰ってから図書館にあることも確かめました。よく見つけて、調べ、答案に生かしたものだとあらためて感心します。今は私が借り出していますので、興味がある方、読んでみようという方は申し出て下さい。

## 「ことばとの出会い」

6, 7はともに趣味的とも言える本ですが、それぞれ役には立ちます。6は、まさに「比較しながら学ぶ」時に参考になるでしょう。英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語に同系統の言語として似たような語彙がある事は、誰でもが知っていることですが、それが事項別・品詞別に整理されているので、便利です。「日常用語40項目, 3000語」が比較対照されています。7は海外旅行には書かせない会話ガイドで、六カ国語の組み合わせはいろいろです。これを持って、ミュンヘンのホテルのフロントでドイツ語をしゃべったら、どうもあなたのドイツ語はおかしい、ちょっと見せてご覧とこの本を取り上げられ、フムフムやはりこの本が間違っている、ドイツ語ではこうは言わない、こう言うのだと本に修正を施された事があります。ご注意ください。まあ語学は経験、実地での失敗を積み重ねて初めてものになるものでしょうけれどね。

8の著者は、「しんみょう, よしつぐ」と読みます。最近の本です。タイトルどおり、40カ国語を修得したという驚異的な人の実地体験談でして、後で時間があつたらもう少しこの本の内容を紹介することにしましょう。

どうもまた騒がしくなってきたようですね。ここで、出席票を配ってしまふことにしましょう。今日はオリエンテーションですが、出席はチャントとります。出席票配る間、どうぞまたしばらくオシャベリしてください。配り方の要領が悪いなんていう批判さえあるんですけど、チャント数を数えながら配っているんで時間がかかるんですよ。前から回してもらふと必ず枚数に変なふうになりなくなってしまうんです。

### 【私がポリグロットでないわけ】

いいですか。出席票は行きわたりましたか。これには、感想・質問・意見等自由に書いて下さい。先ほども言ったことですが、質問は、各担当者に取り次ぎ、コメントをいただいて、それを私がワープロで打ち、プリントして配布します。

さて、私は総合講座「世界の言語」のチーフをやっているわけですが、専

門はロシア文学であって、ロシア語学が専門ではないし、まして言語学が専門というわけでもないんです。先日も、先生は語学専門なんですかと聞かれたりしたもんで、この際、自己紹介を兼ねていわば語学修行的自叙伝というか、手の内を明かしておきたいと思います。

私は、ドイツ文学者の家庭に生まれ育ち、所狭しと洋書に溢れた家に暮らしましたので、語学的環境というようなものがあるとすれば、それには恵まれていたと言うことが出来るのでしょうか。父は、20年仕事で80歳近くに独和辞典を完成させながら、自分の専門は語学ではない。これでやっと専門の文学の仕事ができる。といったような人ですが、ドイツ語以外の語学もかなりやったらしい。古代ギリシア語、ラテン語は勿論、フランス語は何か出版された翻訳までであると言うし、一時アイスランド語に挑戦したりしていました。ロシア語も一通りは勉強したと聞いたときにはさすがにがっかりしました。私が、ロシア語を勉強しようと思ったのは、何よりドストエフスキイの作品をロシア語原文で読みたいという動機があったにしろ、エディプス・コンプレックス的には、ドイツ語ではとてもかなうまい・いくら何でもロシア語までは手が回ってはいまい、といったまことにけなげというかケチな根性もあったからです。それはともかく、家でドイツ語を習ったというようなことは、私が50近く父が90近い今に至るまで絶えてありませんね。この点が、引き合いにださせていただければ、故木村彰一先生なんかとは違うところです。木村彰一先生はロシア文学者で、私は大学院でちょっと習いました。その御父上が木村謹治とって一世を風靡したドイツ文学者で、私の父の先生です。木村謹治は彰一先生に幼少の頃からドイツ語をたたき込んだ。毎日単語の暗記ノルマを課してそれが達成できないと食事抜きといった具合であったらしい。まあ、幸か不幸か私の家ではそういうことはなかった。その後、自発的に何度かドイツ語に挑戦し中途半端に終わる度ごとに、「昔」やっておけばなあと理不尽な後悔の念を覚えたことは確かなんですけれど、子供の頃は、その辺にあるドイツ語のテキストからドイツ語の髭文字を写して遊んでいるくらいが関の山といったところでした。

## 「ことばとの出会い」

だから、外国語学習という点では多くの皆さんと同じく、中学生になって英語ということです。この英語に関しても、今だから白状するんですけど、高校受験の間際までそもそも英語とは何なのかということが判らなかつた。と言っても、別に高尚な哲学的言語学的或いは文化的懐疑なんかではなくて、要するに英語と日本語の置き換え並べ換えなんだということにようやく高校受験間際に気がついたということなんです。それまではそれが納得出来ずにただうろうろしていたんだけど、判ってみれば後は機械的な作業ということになる。ただ、今考えてみれば、この「天啓」が間違いの元とも言えるな。この手で、大学院の受験にまで至る「受験英語」には習熟したけれど、それだけのことですもんね。

そうは言っても英語の勉強はそれなりに面白かつた。特に原仙作先生とその『英文標準問題精講』に出会ったことは大きかつたな。どの時代にも受験参考書のベストセラーはあるんだろうけれど、「団塊の世代」の英語には原仙作『英文標準問題精講』でしたね。参考書で勉強すると共にあっちこっちの予備校にいわば追っ駆けをやって生の授業もずいぶんと聞きました。英語が本当に、構造的に判ったという感じでしたね。蒐集されている例文もいいものばかりでしたね。みんなご自分で集められたものらしい。その点でも、並みの受験参考書とは一線を画していたと言えるでしょう。

しかし、せっかくの英語も大学に入ってロシア語・ロシア文学を勉強するようになって急速に忘れ始めます。というか当面英語の頭を捨ててかからないと、ロシア語が頭に入らないんですね。英語とロシア語とを比較対照したり出来るようになるのは、かなり勉強が進んでからです。何でロシア語なんかを勉強しようと思ったのかと言うと、先ほども言いましたようにまず第一にドストエフスキイ。ついで、早稲田露文科出身の作家達の活躍。卒業・中退・抹籍含めて多くの作家（漫画家もいる）達がデビューした頃だったんです。今では流行らない文学青年で作家志望の面もかなり強かつたしね。それに、本当はこれが一番決定的な理由かもしれないが、当時露文は早稲田にしか無くその早稲田は自宅から一番近い大学、徒歩10分もかからないところに

ある大学であったことなんです。子供の頃の遊び場の一つでもあったしね。ロシア語の勉強はかなり真面目にやりました。特に、入学2年目の後半文学部構内で起きた或る事件とそれをきっかけにしたストライキが大きかった。つまり授業が半年ばかり出来なかったわけです。そんな状態で3回生、ロシア文学専攻で作品を読み始める。全然読めないわけですよ。そこでむきになって勉強する。紛争後遺症、教室に漂う徒労感、そういったものに対して全然関係ないんだけど、ロシア語学習で孤軍奮闘するとか、自分なりに精神の立て直しを計っていたんだと思う。それから、結局はロシア語を仕事とするようになったことから考えて、「縁」があったんだと思うし、「波長」も合ったということかな。

3回生の夏休みには初めてロシアに旅行した。もう20年以上前になりますね。当時は勿論まだソ連の時代です。友達と二人の道中、横浜からナホトカ航路、ハバロフスク、イルクーツ経由モスクワ、レニングラード（現サンクト＝ペテルブルグ）という行程。ここから友人はフィンランド経由イギリスへ、私はキエフ経由ルーマニア、ブルガリアを抜けてギリシアのアテネまで行って折り返すというものでした。友人はそれから半年くらい帰ってこなかったんだけど、私は1ヶ月ほどの旅行でした。まあ習いたてのロシア語はそれなり役に立ったけれど、どちらかと言えば友人の英語の方が無難であったかも知れない。でも、教室で習ったことが、旅行とは言え現実に通用することにある感動のようなものを覚えたのも事実であります。それに、いくら英語の時代とはいえ、現地の言葉しか通じないところも多いことは覚悟しておかなければいけませんね。新婚旅行ということではないんだけど、結婚2年目に夫婦でドイツに旅行したことがある。フランクフルトに降り立った時から当然のことながら、ドイツ語。ちょっとこれにはまいりましたね。ドイツ語多少はたしなんでいたんだけど、全部ドイツ語というのにはまいりました。すくんでしまうんですね。次第に慣れては来るんだけど、その後フライブルクにしばらく滞在し、そこを拠点にあちこち出歩いていたとき、宿のおかみさんに「3日間パリに行ってくる。また戻ってくるので、その間

## 「ことばとの出会い」

荷物を預かっていて欲しい」ということを納得してもらうのに、四苦八苦。結局、たまたま居合わせた大学生に通訳してもらって、つまり、彼に英語で話し、それをドイツ語にしておかみさんに話してもらったのです。まあ、大汗かきましたね。

しかし、外国旅行で言葉に不自由するというのは、苦痛とばかりは言えない面もありますね。日常我々は、日本語のシガラミの中で生活しているわけです。それが、飛行機に乗ってパッと母語の通じない異国の街中に投げ出される。道行く人々がたとえ自分の頭の中を覗くことが出来たとしても、彼等にとっても日本語はチンプンカンプン。そこに、解放感というか、「自由」の感覚さえあるように思うんです。高い金出して何しにこんな遙か遠くまで来たんだと言われようと、これは貴重な。精神がリフレッシュするよね。

話が、少し先に行ってしまったけれど、大学院時代には、語学研究グループに加わったりしたこともあります。出来るだけ多くの言語を手当たり次第学ぼうという趣旨(?)の小グループで、ウクライナ語の後半から参加したのでした。次が、ブルガリア語。ちょうどブルガリア留学から帰ってきた先輩がいたので、教えてもらったわけです。ウクライナ語、ブルガリア語はスラヴ語系の中でもロシア語に最も近い言語で判り易かったんですが、フランス語回りからだんだん怪しくなってきました。ツテをたどってフランス人女性を先生に頼み、勉強を始めたんですが、彼女日本語がほとんど駄目。けれど、ロシア語は出来る。そこで、ロシア語を使ってフランス語の授業を受ける羽目になって、これはいささかしんどかった。時として、いかなる言語も脳中になく、真っ白という具合だったりして。次は私が段取りを付けて、テレビのドイツ語講座のアシスタントをしていた女性をスカウトしまして勉強を始めました。今度こそと思って始めたドイツ語、かなりいい線までは行ったと思うが、全うすることは出来なかった。もうこの頃は、大学で仕事をしていたし、忙しくなっていたというのが言い訳ですけれどね。世界の言語研究グループも活動そのものがこの辺りで立ち消えとなったのではなかったかと思います。実は、ドイツ語はその後もう一度挑戦したことがあります。シュ

タイナー教育やミヒャエル・エンデの研究で著名な教授が教職員向けに開いた講座に出たのですが、これも全うできず、勉強したということそれ自体がいつか役に立ちます、と教授に慰められたものでした。

まあ、こんな具合でありまして、「世界の言語」のチーフをしているからといって、決して言語学専門でも、ましてポリグロットでもなく、要するに私もまた皆さんと一緒に世界の様々な言語を勉強して行こうとするものです。この経験は、即効性はあまり無いかも知れないけれど、世界の言語の多様性、その一端にでも触れたという経験はやがてじわりといろいろな場面で効いてくるものと思われまます。

さて大体こんな所で、今日の話は終えようと思いますが、二、三気がついたことを言っておきましょう。まず、文字と発音の問題ですが、文字と発音の結びつきには、何の必然性も無く、それは恣意的なものであるということ。「A」で「ア」という音を表すと決めたのだけのことであって、この文字で「オ」の音を表すと決めることもできたということです。それと、我々は英語のアルファベットにあまりにも慣れすぎてしまっているということ。とりわけ、ドイツ語、フランス語、イタリア語もスペイン語も大体がこのアルファベットで表記するので、それ以外の文字を見ると必要以上に驚いてしまい、拒否反応を起こすようですね。ロシア文字なんか見ただけでビックリするようでは駄目であって、世界の言語が多様であると同時に、文字もまた多様であることをよく知ってもらいたいと思います。さらに念のため言っておくと、アルファベットという言葉は、その言語を表記する基本的字母を意味するのであって、英語のアルファベットだけを意味するのではないということです。ロシア語の字母33文字も、アルファベットって言うんですよ。

それに、名詞の性の区別、これも英語にはほとんど無いことなんで驚くというか、素朴に知らなかったと反応する人が多いんだけど、ヨーロッパ系の言語には大体この区別があってむしろ無い方が少数派だということも知ってほしいな。さらに、この男性・女性・中性というのは文法的な性の区別であって、現実の性とは直接関係がない、ということも間違えないようにして

## 「ことばとの出会い」

下さい。ロシア語で言えば、「机」が男性名詞、「本」は女性名詞、「言葉」は中性名詞なんて言うとビックリしてしまうらしくて、なんでやなんでや、となる。理由を説明することは、ロシア人にも難しく、要するに文法的に昔からそうなっているということにすぎないのです。

あー、新名さんの本のことを話す時間がなくなってしまったけれど、新名さんは現在ニューヨークで歯科医を開業されている方で、そういった仕事を持つ一方で一種の語学マニアと言おうか、中学の英語以来、高校でドイツ語、フランス語、ロシア語を初めとし、現在までスワヒリ語までを含め40ヵ国語をマスターしたという驚異的な方です。その体験談を含め、40の各言語について特徴や簡単な会話文を提示してある興味深い本です。40ヵ国語をマスターした新名さんの言うところでは、語学学習のポイントは結局反復練習につきるといことです。また、しばしば現地に行くのが上達の近道と誤解されているが、現地に行っても自然に身につくわけではなく、やはり意識的に努力しなければ語学は身につかないと言っています。この辺なんかも耳を傾けるべきところでしょう。

さて、それでは、来週は山川先生にギリシア語について話していただきます。